

8月22日 (水) 13:30/14-306・307・308教室

07発-22-ポ-16

遊び志向調査カードを用いた幼児の遊び特性と体力との関係

○高木 綾子 (岐阜大学大学院)、春日 晃章 (岐阜大学)、福富 恵介 (岐阜大学)

本研究は、遊び志向調査カードを作成して幼児の遊び特性をとらえ、体力との関係を検討することを目的とした。

被験児は、年長児122名であった。調査は、遊び内容(乗り物、遊具、かけっこ、ボール、縄跳び、けんけんば、鉄棒、絵本、おもちゃ、お絵かき、粘土、砂遊び、ままごと、TV、ゲーム)を写真で表した遊びカードを利用し、園および家庭で最もよく行う遊びを験者との対面形式で選択させた。この調査は、担任に園児と同様のアンケートを実施し、ある程度の妥当性が確認された。体力測定は7項目を実施し、全項目の平均T-スコアを性別に算出し体力総合得点とした。結果、園内でよく行う遊びは遊具20%、ボール遊び15%、また家庭でよく行う遊びはゲーム56%、TV15%の順が多かった。園では外遊びが多い傾向を示したが、家庭ではゲームなどの室内遊びが多かった。さらに遊びを“運動遊び”、“ボール遊び”、“遊具遊び”および“室内遊び”の4群に分けて園での遊び志向別に体力総合得点を分析したところ、ボール遊び(54.2)と室内遊び(48.6)の間に有意な差が認められた。ボール遊びをよく行う幼児は体力が高いことが示唆された。

8月22日 (水) 13:30/14-306・307・308教室

07発-22-ポ-17

幼児の身長発育と走タイムとの関係

○高木 雄基 (岐阜大学大学院)、春日 晃章 (岐阜大学)

本研究は、年少、年中及び年長時の幼児を対象に身長及び25m走を実施し、発育と走タイムとの関係性を明らかにすることを目的とした。測定は、1年に1回、12月に、身長及び直線30mの全力走において、スタートから25m地点通過までの記録の測定を実施した。年少、年中及び年長時の3年間通して縦断的データが獲得できた幼児は、合計990人であった。分析の結果、幼児の身長の高さと25m走の記録について有意な相関関係が認められた。しかし、年少から年中、そして年長へ成長するに伴って、身長の高さと25m走の記録の相関係数が低くなっていったことから、幼児期においては加齢に伴い、身長が25m走の記録に与える影響は少なくなっていくことが明らかとなった。また、身長発育率と25m走の記録の短縮率には関連がほとんど認められなかったこと(年少から年中期: $R = 0.088$ 、年中から年長期: $R = 0.030$)から、身長発育が25m走の記録の短縮に与える影響は小さいことが示唆された。このことから、幼児期においては発育の程度よりも、遊びを中心とした走経験が技能の成熟に寄与していると考えられた。

8月22日 (水) 13:30/14-306・307・308教室

07発-22-ポ-18

幼児の跳躍動作における研究

○濱口 幸亮 (岐阜大学大学院)、春日 晃章 (岐阜大学)、福富 恵介 (岐阜大学)、
内藤 譲 (岐阜県スポーツ科学トレーニングセンター)

本研究は年少児の跳躍動作について三次元動作解析を行い、キネマティクスの観点からその特性を明らかにすることであった。被験者は、7項目からなる幼児体力テストを行った年少男児105名の中から立ち幅跳び跳躍距離の上位群(6名)および下位群(6名)の計12名であった。両群の立ち幅跳びをハイスピードカメラ(CASIO EX-F1)4台で撮影し、Frame-DIAS4(DKH社製)を用いて動作開始から離地までの各関節の動きを解析した。分析の結果、両群間で膝関節の最大屈曲角度(上位群 $79.7 \pm 5.8 \text{deg}$; 下位群 $99.3 \pm 10.1 \text{deg}$)、腕を前方に振りこむときの最大角速度(上位群 $762.1 \pm 167.5 \text{deg/s}$; 下位群 $279.3 \pm 159.6 \text{deg/s}$)、膝関節の最大伸展角速度(上位群 $725.3 \pm 152.3 \text{deg/s}$; 下位群 $433.6 \pm 117.1 \text{deg/s}$)に有意な差が認められた。この結果から、大きく屈曲した膝関節、速度が高い腕の振りこみおよび膝関節の伸展が跳躍距離に反映させているものと考えられた。よって年少児の跳躍動作は身体を深く落とした状態から、腕を振って跳躍する動きが重要だと推察される。